

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

第 18 号

2020（令和2）年4月

聖心女子大学

氏 名 山本 りりこ (やまもと りりこ)

学位の種類 博士 (文学)

学位記の番号 甲第 42 号

学位授与年月日 2020 (令和 2) 年 3 月 14 日

学位授与の条件 聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当

審査研究科 聖心女子大学大学院文学研究科

論文題目 ジュール・ラニョーの知覚論：
精神と身体を統合する判断の能動性

論文審査委員 (主査) 教 授 富原 眞弓
(副査) 准 教 授 上石 学
(副査) 准 教 授 CORBEIL S. (国際交流学科)

博士学位論文の要旨

本論文の主たる対象はジュール・ラニョー(1851-1894)の歿後半世紀をすぎた1950年、その名を冠して出版された代表的テキスト『名講義集』所収の「知覚についての講義」である。本講義はまず外的対象の知覚・認識の形式を吟味し、五官それぞれの機能が具体例に則って説明される。同講義内で五官は味覚・嗅覚が属する変状を被る(affectif)低次の感覚と、視覚・触覚・聴覚が属する表象的(représentatif)高次の感覚とに二分され、表象にかかわる後者に属する感覚が重点的に語られる。したがって本論文でも、高次の知覚に分類される視覚・触覚・聴覚についての記述に着目したい。さらに、ラニョーの晦渋なテキストの真意を読み解き、思想の独自性を強調するために、18-19世紀フランス知覚主義の潮流に着目しつつ、ラニョーが継承した思想や方法論と、独自に展開した思想に言及した。

第1章では視覚をとりあげた。ラニョーは当時の主流であった心理学による説明だけではなく、網膜像や単眼視や両眼視とのあいだに生じる差異を指摘する生理学的な説明も援用し、身体とかかわる感覚印象の予見(prévoir)が知覚の成立の一条件であると強調した。つまり、ラニョーは知覚には判断という精神の能動的な活動が必要であると主張しながらも、身体的な感覚も軽視してはいなかったのである。このことは、ラニョーが観念論的な枠組みにおさまらない新たな立場から論じていることを示しうる。加えて、知覚を助けてより正確なものへと導く一方で、錯覚や誤謬の原因ともなる、知覚に及ぼす習慣の二面性を明らかにする。こうした錯覚についての記述は、知覚が無媒介的なものではなく、必然的に判断を含む、とするラニョーの主張の傍証となる。

第2章では、触覚についてビランの影響を確認しながら論じた。講義内で用いられる「筋肉的(musculaire)」「努力(effort)」「抵抗(résistance)」はラニョーがビランから継承した語彙である。本論では、ビランからラニョーへの思想的影響を指摘すると同時に、類似する語の使用意図が両者間で異なる箇所をとりあげ、ラニョーの理論の独自性を明らかにした。ラニョーがビランから努力や運動性を重視する着想を得た一方で、ビランが中心的に論じる知覚する主体の自我(moi)の成立過程よりも、精神による能動的判断を証明することを知覚論の核とした点は考慮に値する。ラニョーが知覚を論じる際にビランに比べて自我について論じることが極端に少ないのも、両者が主張の強調点を異なる場所に置いているためだ。このことは、コンディヤックやボネが展開した彫像の思考実験等に対して両者が行なった批判の論点の相違や、筋肉的感覚印象と行動の感情とを区別する観点の相違のうちにも確認できる。ラニョーはビランの知覚論を参照しながら、精神の能動的なはたらきを強調する点で独自の論を形成していったのである。

習慣が知覚に及ぼす作用の二面性と習慣における受動性・能動性の考察もまた、多くをビランに負っているが、受動的習慣と能動的習慣をビランが区別したのに対し、ラニョーは区別をしていないという両者間の相違も認められる。ラニョーによれば、アリストテレスの錯覚の例に代表される触覚の錯覚もまた、視覚の錯覚と同様、知覚作用における判断の介入を示している。対象についての無媒介的な知覚が存在するなら、そもそも錯覚が生じる余地はないからである。

第3章では聴覚を論じるなかで、音楽の知覚にあえて踏み込んだ。聴覚についての記述は、

ラニョーが「音」ではなく「音楽」を主題としている点で特徴的である。第3章で、1章と2章ではみられなかった、知覚対象によって知覚主体の心が動かされる体験への言及がみとめられるのも、視覚や触覚についての記述では絵画や彫刻といった芸術作品が知覚対象として措定されていなかったのに対し、聴覚についての記述では芸術作品が対象となっていることが影響している。そのため、論考にある種の飛躍が生じる。情動 (*émotion*) という語が聴覚についての記述でのみ用いられていることも、この論考の飛躍を表している。

この章では聴覚についての記述が音楽に特化した所以を明らかにすべく、音楽の構成要素の特徴と期待という精神のはたらきを考察した。ここではビランの音楽についての記述がラニョーの理解に有効であった。ビランは、音楽的聴覚を語る際に知覚的判断と感受的作用とが反比例する関係にあると理解し、聴覚においては聴取の行為と内的な再生や発声の行為とが密接に結びつくと考えていたのである。これを踏まえて、ラニョーは音楽の構成要素を分析し、音の鋭さや強さは継起する他の音との比較に基づく相対的な知覚であること、およびひとつひとつの音は時間持続に支えられると同時に、音楽という諸音の総体も時間持続によって成立することを示し、音の知覚と持続との本質的な相関を指摘する。音が関係性の知覚であることと、時間持続に支えられていることとは、音楽的知覚において相互に必然的なことがらである。音の連続が構成する音楽は、音と音との持続と、持続のなかで継起する諸音の関係性によって成立する。さらに律動は音の持続を区切る尺度を、旋律は主音による音同士の結びつきを示している。

ラニョーの音楽的知覚の記述でとりわけ重要なのは、継起する音において次の音を期待 (*attente*) する精神の能動的なはたらき、そして、音楽が引き起こす変容 (*modification*) への着目である。ラニョーは音楽が期待に支えられていることを指摘するさい、とりわけ旋律への期待が生じるのは中心的な音を欠く場合であると述べ、旋律において欠けている要素が、われわれの聴覚の期待の性質を最大限に引き出すと主張する。音楽が引き起こす変容、すなわち音楽的知覚とは、われわれを外部に連れ去ると同時に、われわれのうちで流れている行動の諸要素を新たな形式へと組み入れるための不断の努力でもある。それは、音楽的知覚には期待する精神の内的なはたらきと、情動によってわれわれを外部へと連れ去る動きとが内包されているからに他ならない。つまり、音楽的知覚における変容は、期待と情動が相互に刺激しあうことで生じるものであり、受動と能動のあいだ、情動と行動の相関性のうちに生起すると捉えられているのである。

音楽的知覚とは、外部の音に惹起される一方で、期待という内的なはたらきでもある。だからこそ、音楽的知覚とはわれわれの内的生の真の姿を表象するもの、あるいはわれわれの行動の諸要素とかかわるといわれるのである。

先に述べたとおり、1章、2章とは異なり3章では、生理学的な分析から、身体や情動をも包括する全人的分析へと移っており、論の飛躍が看取される。この飛躍は、ラニョーが知覚論を拡張しようとした痕跡とみてもよい。ラニョーは音楽を主題とすることで、音楽に感動する、という非常に個別かつ情緒的に思われる経験のうちにも精神の能動的なはたらきを語ろうとしているのである。

以上のことから、ふたつの結論が導かれる。第一に、ラニョーの知覚論は判断・予見・期待といった語を用いながら、一貫して知覚のなかに精神の能動的なはたらきが存することを

強調するものである。第二に、ラニョーの知覚論は精神の能動的な判断を強調すると同時に、身体と精神の一種の協働関係を示唆するものであり、単純な心身二元論の枠組みには収まらない展開が見出せる。ラニョーは一貫して精神の能動的な判断を強調しているが、場所を占める身体、あるいは感覚印象という身体的感覚も考慮しながら論を進めている。筋肉的、あるいは努力・抵抗という語をピランから継承したのも、身体性への言及が不可欠であると考えていたからに他ならない。

『名講義集』所収の「判断についての講義」「神についての講義」「明証性と確実性についての講義」でも精神の能動的判断は論じられるが、「知覚についての講義」は知覚という最も身体的な項において精神の能動的判断を論じる点で特徴的である。テキストにみられる精神のはたらきと身体性の共存、哲学的な記述と生理学的な記述の共存は、知覚を異なるふたつの視点から語ることを模索する道筋へのひとつの指標となるだろう。

ラニョーは、期待や予見という概念を用いて精神の能動的かつ自由な判断を強調する一方で、筋肉的感覚印象とは何であるかを探求したり、予見を身体とかかわりのある感覚印象と結びつくものとして措定したりする点において、決して身体性を見落としてはいない。それどころか、判断・期待・予見という概念は、精神と身体を結びつける方向にはたらく。身体的感覚と精神は、判断を媒介として協働的關係を結ぶことができるのである。

本論文は、近代フランスの反省哲学および知覚論の伝統のなかにラニョーの哲学を置きなおし、「知覚についての講義」を仔細に検討した。今後は、フランスの現代哲学にみられる心身論へのラニョーの直接的・間接的影響の解明を課題としたい。

学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者	山本 りりこ
論文題目	ジュール・ラニョーの知覚論：精神と身体を統合する判断の能動性
審査委員	主査：富原 真弓 副査：上石 学 副査：CORBEIL S. (国際交流学科)

1. 論文の要旨

ジュール・ラニョー (Jules Lagneau, 1851 - 94) の「知覚についての講義」(‘Cours sur la perception’) では、外的対象の知覚・認識についての抽象的な議論を切口に、5つの感覚器官の各機能が具体的に説明される。変状を被る(affectif) 感覚と表象的な(représentatif) 感覚とに二分され、前者は味覚と嗅覚の属する低次の感覚、後者は視覚、触覚、聴覚の属する高次の感覚として定義される。

本論文では高次の知覚に分類される視覚、触覚、聴覚に焦点をしばり、ラニョーの知覚論の特性を論じる。そのさい、その思想の独自性を浮きあがらせるために、コンディヤック(1714 - 80)、シャルル・ボネ(1720 - 93)、とりわけ少なからぬ影響を与えたと思われるメーヌ・ド・ビラン(1766 - 1824)らの、生理学・心理学・感覚論・身体論の渾然一体とした18 - 19世紀フランス特有の知覚主義との相違に着目した。これが本論文の特徴である。

第1章で扱う視覚について、ラニョーは当時の主流であった心理学的説明に加えて生理学的な説明も援用し、身体とかかわる感覚印象の予見を知覚の成立の一条件と明言する。しかし一方で、知覚には判断という精神の能動的な活動が必要であると主張しており、身体的な感覚の偏重には陥っていない。このことは観念論的な枠組に収まらないラニョーの柔軟性の証左ともなる。

第2章ではビランの影響を考慮しつつ触覚の機能が検討される。「筋肉的(musculaire)」「努力(effort)」「抵抗(résistance)」などがビランから継承した語彙であることを確認すると同時に、類似する語の使用意図が両者で異なる箇所に着目し、ラニョーの独自性を示唆した。ラニョーがビランから努力や運動性を重視する着想を得ながらも、ビランが重要視した知覚する主体の自我の成立過程よりも、精神による判断や肯定を知覚論の核とした点に、本論文の筆者は注意を喚起する。自我をめぐるこの違いは、コンディヤックやボネにたいする両者の批判の論点の相違や、筋肉的感覚印象と行動の感情とを区別する観点の相違のうちにも認められた。ラニョーはビランの知覚論を下敷きとしつつ、精神の能動的な営みを強調することで独自の論を形成していった、という主張が導かれる。

第3章では聴覚に関連して、音楽の構成要素である音、律動、旋律の特徴および期待という精神のはたらきが考察されるが、そこでは知覚的判断と感受的作用とが反比例すると考えたビランの音楽論が有効に援用されており、そこに筆者の創意を認めることができる。

ラニョーによれば、音の鋭さや強さは継起する他の音との比較にもとづく相対的な知覚であり、個々の音は時間持続に支えられると同時に、音楽という諸音の総体も時間持続によつ

て成立する。ゆえに音の知覚と持続とは分かちがたい結びつきが存する。とくに重要なのは、継起する音において次の音を期待 (attente) する精神のはたらき、その結果として音楽が精神の内部に引き起こす変容に、ラニョーが着目したことである。旋律への期待が生じるのは中心となるべき音を欠いている場合であり、旋律における欠落こそが、われわれの聴覚の期待の性質を最大限に引きだすのだと、ラニョーは指摘する。音楽がわれわれの内部に引き起こす変容、すなわち音楽的知覚とは、われわれを外部に連れ去ると同時に、われわれのうちで流れている行動の諸要素をあらたな形式へと変換しようとする不断の努力なのである。

第3章は先の2章と異質な印象を与えるが、むしろ補完的な役割を担っており、外界にはたらきかける精神の自由な判断が心身を統合し、有効にして有益な行動へと結びつけると確信していたラニョーにふさわしい知覚論といえよう。

2. 本論文の評価

本論文の目的は、ラニョーの諸テキストの系統的な解説、知覚論の独創性の分析、そして哲学的脈絡における再評価である。哲学者ラニョー本人とその哲学的営為の特異性、本論文の主たる考察対象の「知覚についての講義」(『名講義集』所収 1950) の特殊性について以下に説明する。

ラニョーは系統立った論考や著作をいっさい残さず、リセの哲学教授の職務に専心した。しかも個別の学説ではなく、《哲学すること》を教えたので、一派をなすことはなかったが、資質も心情もまったく異なる《弟子たち》が育った。たとえば、意志の力に絶対の信頼をおくアラン (エミール=オーギュスト・シャルティエの筆名 1868 - 1951)、農夫、鱈漁師、遠洋航路の水夫を経験したのち、30歳近くでラニョーに逢って哲学に《めざめ》たレオン・ルテリエ (1859 - 1926)、社会主義者からフランス・ファシストの理論家に横滑りして師を嘆かせたモーリス・バレス (1862 - 1923)。これら知名度では師を凌駕するに至った往時の生徒たちの薫陶をうけて、伝えられた哲学と方法をみずからの流儀で実践する個性的な《孫弟子たち》が次世代から育っていった。思想的には穏健で教養主義的な作家アンドレ・モーロア (1885 - 1967)、機械論的な生命観を批判し病理の再定義を訴えたジョルジュ・カンギレム (1904 - 95)、そして師アラン以上にラニョーの方法を徹底し、労働する身体における知覚の決定的な役割を確信していた点で、学説の内容ではなくその精神においてもっともラニョーに近いとされるシモーヌ・ヴェイユ (1909 - 43) に至るまで、その拡がりの全貌はいまだ解明されていない。ラニョーの遺稿を整理し、講義録や覚書を集めて体裁をととのえて出版し、折につけ宗教的敬虔さをこめて師の名を口にする《弟子》や《孫弟子》なしには、著作のないジュール・ラニョーの名は不当にも完全に哲学史から抹消されていただろう。

本論文は、ラニョーの知覚論の丁寧な検討を通じて、18 - 19世紀フランスの生理学的知覚論と、20世紀後半のメルロ=ポンティ (1908 - 61) やミシェル・フーコー (1926 - 84) の現象学的もしくは構造主義的な視点から読みかえた身体論とを繋ぐ、これまであまり着目されてこなかった地下水脈の存在を示唆する試みである。

今回の試みは、時間的な制約もあつてか、完全に網羅的であるとはいえず、ときおり論を急いだ感があるのは否めないが、これは今後の研究過程で是正されていくだろう。現在、ラニョーを含むこの周辺の哲学者たちを再評価する傾向は、フランス語圏をはじめ日本でも次

第に強まってきており、修士論文でメルロ＝ポンティの身体論を扱った筆者にも、この論文を足掛かりとしたさらなる研鑽と学術的貢献を期待したい。

3 回の審査会と最終試験では、以下の評価があった。まず、重要であるにもかかわらず、ほぼ未踏の領域とあってよいラニョーの知覚論に踏み込んだ意欲的論文である。韜晦をもって知られるラニョーの講義録を読み解くにあたり、ラニョーが依拠したビランのやはり同様に難解なテキストを比較検討し、ラニョーの独自性を浮き彫りにするという方法論は有効であり、博士学位申請に妥当な成果を導きだした。邦訳書の存在しないラニョーをはじめ、使用テキストの大半が未邦訳であり、難解なテキストを活用して自説を組立てた努力を評価したい。また、最終試験における論述や配布資料の内容に、審査会の指摘をうけての論述の深化、および筆者の真摯な研究姿勢が確認できた。

第1章、第2章の視覚と触覚の考察が身体的・生理学的な次元に限定されているのにたいし、第3章の聴覚の考察で心理学的・情緒的な次元へと飛躍するのは、やや唐突な印象を与えるという意見があった。他方、第3章は単独でみるなら興味ある論考であり、音ではなく音楽を論じることで、心身の二元論的対立に情動という第三項を招き入れる可能性を拓く工夫だとも考えられる、という指摘もあった。この指摘は本論文の筆者の意図するところであり、今後の研究の進展へとうながす建設的な知見とうけとめたい。

3. 本論文の審査の過程

以下に本論文の審査の過程と結果を報告する。

2019（令和元）年10月31日、本論文が博士学位申請論文として提出された。

2019（令和元）年11月4日、学長より博士学位申請論文審査の付託がなされ、同年11月12日、大学院委員会の了承を得て、3名から構成される論文審査委員会が設置された。

2019（令和元）年11月22日に第1回論文審査委員会が、同年12月5日に第2回論文審査委員会が開かれた。この2度の審査のさいに審査委員から呈された質問や意見を、主査が学位申請者に口頭で伝え、申請者の対応を審査委員会に説明し、審査委員会の許可を得て、申請者に必要な加筆修正をさせた。

2020（令和2）年1月28日、文学研究科人文学専攻の3領域の代表および審査委員により、最終試験が実施された。申請者の研究発表と質疑応答を通じて、説明能力、対処能力、学術的な見識、外国語の運用能力が評価され、人文学専攻の最終試験は合格とされた。

同日、最終試験に引き続き、第3回論文審査委員会が開かれた。論文審査委員会は、先の最終試験の結果をふまえ、本論文の研究意義、論理的整合性、独創性、学術的貢献、研究倫理の遵守を総合的に勘案し、本論文を人文学専攻の博士（文学）の学位にふさわしいと判断した。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第18号

2020（令和2）年6月25日発行

発行 聖心女子大学大学院
編集 聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾4-3-1
電話 03-3407-5811（代表）